「春秋・戦国時代の北方国家と社会」——華夷共生社会の成立——

九嶋利宏

【目次】

序論
緒言
第一節　日本における春秋・戦国時代史研究
第二節　華夷研究
第三節　近年の北方地域古代史研究
小結
第一章　戦国燕の国家的性質
—古代東アジアにおける「経済大国」—
緒言
第一節　春秋以前の燕
第二節　戦国燕の産物と都市
一、戦国燕の産物
二、戦国燕の主要都市の性格
第三節　明刀銭の分布と交易
一、明刀銭の分布
二、日本出土の明刀銭と交易
三、布銭と燕趙交易
小結
第二章　先秦期における中原と北方の関係について
—晋における北方民との婚姻を中心に—
緒言
第一節　戎狄と呼ばれた人々
第二節　晋と戎狄の関係
小結
第三章　戦国趙における「胡服騎射」改革
緒言
第一節　変法記事と胡服騎射記事の相違点
第二節　胡服騎射改革の導入目的とその後の影響
第三節　胡服騎射導入の背景
小結
第四章　戦国中山国の社会と国際関係
緒言
第一節　戦国中山社会の実態
第二節　国際社会における中山
小結
第五章　秦における異文化融合—春秋穆公期以前を中心に—
緒言
第一節　編纂史料から見る春秋秦
第二節　春秋秦における墓葬
第三節　春秋秦における祭祀
第四節　戦国時代における秦の社会

小結

結論

【要旨】

序論

春秋・戦国時代は、統一国家としての中国の形成期であるとともに、民族的に漢民族の雛型が形成される点においても重要な時代である。このような先秦時代を日本では早くから、国家形態の継続的展開から、氏族制社会→都市国家（邑制国家）①→領土国家（領域国家）→古代帝国という流れによって理解が試みられてきた。②一方、第二次世界大戦以後の日本における中国古代史研究の中心は、後の中国の歴史に強い影響を与え続けたと考えられる秦や漢の国家構造がどのようなものであり、それはどのように形成されたかという問題であったと言える。したがって、春秋・戦国時代、特に秦・漢時代に直接繋がる戦国時代は、その形成期として強く意識されてきた。それゆえ、その研究内容は秦・漢時代との連続性を論証することに重点が置かれた。

しかし、これらの研究は主としてその国内制度や諸侯国間の関係にのみ焦点を当てたものである。西嶋定生氏は、春秋・戦国時代における中国の社会と国家の「変動の結果、中国周辺の諸民族ははじめて中国の影響を受け、これに刺戟され、その社会には政治的社会への胎動が開始される」と述べる。③西嶋氏のように、日本における中国古代史研究は、常に優れた中国文化が外部の未開地域に影響を与えるという図式、中原文化優勢史観に基づいて研究が行われてきた。④

このような研究の背景には、主に漢民族が自己の文化的・政治体制的に周辺民族よりも優位に立ち、それら周辺民族を未開で野蛮な人々、つまり夷狄として定義付ける華夷思想を、当時の社会に無批判に適合させる考えが存在している。確かに、中国を主体として記された史料には、華夷思想的観念を窺わせる記述が見られる。これに対して、平勢隆郎氏は『春秋』三伝中に見られる中華と夷狄には、夫々の成立地における中華と夷狄に関する捉え方が反映されており、国家ごとに複数の中華が存在していたとして、既存の華夷思想とは異なった華夷関係を想定する。⑤また、鶴間和幸氏は古代の中華を地域概念における一つのシステムとして捉え、中華を都市国家（邑制国家）→領土国家（領域国家）→古代帝国という変化の中で、異質性（戎狄）を否定して一律に同質化（中華）していくのではなく、異質性をある程度温存した共存（華夷）であったと想定する。⑥また、渡邉英幸氏は、夷狄と中華は本来来源を異にする別個の観念であり、「夏」を王朝の中心地や周王朝の文化秩序を指した呼称として理解する。そして、既存の「礼」の有無や言語文化の違い、あるいは民族的違いと考えられてきた華夷思想の基準に対して、中華と夷狄には重層的な関係が存在していたことを述べる。⑦すなわち、華夷思想には元来明確な統一された基準が存在しなかったとする。

しかし、近年の華夷研究の中心はあくまで華と夷の関係を新たにどのように定義付けるかに主眼が置かれている。その為、その関係が、歴史的にどのような意義を有するのかについての議論はされていない。それでは、史料中の華夷思想に対する先入観を捨てた場合、春秋・戦国時代に消えていく夷狄と呼ばれる人々が秦漢帝国形成に対してどのように寄与したのであろうか。そこで、本論文で特に注目したのが、春秋・戦国時代において、中原の農業世界と特に異なる生業（遊牧・牧畜）を有する世界が接触する地域であった中国北方地域である。

中国北方地域は、中国社会の拡大によって春秋・戦国時代を通じて常に異文化民との接触があり、戦国時代後期にその拡大が終了する。その為、この地域は他の地域に比べ、異文化民による圧力が強い地域であり、このような圧力は、後代の秦・漢時代にも匈奴からの圧迫という形で明確に表れている。

近年、中国考古学界では、当該地域を農耕社会と遊牧社会の境界地域として遊牧・牧畜・農耕が混在する社会として想定することが主流となっており[8]、日本においても考古学的観点から宮本一夫氏も新石器時代にまでさかのぼり考察することで、同様に指摘している[9]。

一方、歴史地理学的に中国北方地域に注目したのが、妹尾達彦氏である。妹尾氏は紀元前九世紀～五世紀にユーラシア大陸において農業国家と遊牧国家の形成とともに農牧複合地帯（農業遊牧境界地帯）が異なる産物の交換の場として形成されたと指摘する。その上で、この農牧複合地帯が、前近代を通じて農牧の交錯する一つの複合的世界であり、農業世界（中国）もしくは遊牧世界の辺境などではなかったと述べる[10]。

この妹尾氏の説を受け、馬彪氏は、この地域を中華文明形成史上極めて重要な文明の誕生地域であるとする。そして、当該地域に中国初の統一帝国を成立させる秦が位置することに注目し、この地域に位置することが秦帝国形成の一要因であった可能性があると考えている[11]。

このように、近年中国北方地域は考古学の分野で採り上げられているが、歴史的にどのような意義を有する地域であるかについては議論が深められていない。しかし、古代の華夷関係について注目した場合に、その関係性が明確に見て取れるのが、秦・漢時代以降遊牧民という明らかに異なる文化を有する集団によって圧力を受けることとなる中国北方地域である。

春秋・戦国時代、中国の北方地域では生業の異なる文化が接触することで、中原地域とは異なる文化・社会が形成されていたことが想定される。しかしながら、このような異文化の接触により生まれる異文化共生社会[12]がどのように秦漢帝国形成に影響を与えることとなったかについては、従来の研究では十分考察されてこなかった。

本論文においては、先行研究において示されてきた中原文化優勢史観に対して、北方地域では異文化との接触とそれによる共生社会が誕生していたことを論じる。その上で、春秋・戦国時代に誕生す

る華夷共生社会が、中原地域に与えた影響と後の秦における帝国形成における役割について検討を行う。

本論

本論では、春秋・戦国時代の燕・晋・趙・中山・秦という北方の国家における社会について考察を行った。その中で第一章から三章において注目したのが、中原民を主体とした国家が、異なる文化を有する集団と接触することによってどのような変化が誘起されたのかという点である。

第一章の「戦国燕の国家的性質—古代東アジアにおける「経済大国」—」では、春秋以前の燕については『史記』等の史料上の記述からの理解だけでは不十分である為、西周期の琉璃河墓地に注目した所、既に指摘されていることではあったが、燕侯・殷系・在地勢力という三つの異なる文化系が存在しており、当時の燕の社会においては文化が混在した状態であったと理解できる。このように、西周期に異なる文化と接触した国家がどのような戦国国家へ変化したのかを、文献資料から主としてその土地と都市について確認した。『漢書』地理志や『塩鉄論』の記事からは、豊富な山林藪澤の資源を有していたことや朝鮮半島と交易を行っていたことが分かり、燕においては非中原民との接触によって、それらによる富がもたらされ、燕最盛期の昭王の強大な専制君主権力が形成されたことが明らかになった。このことは、出土遺物である明刀銭が、戎狄の貨幣と認識される尖首刀と形状が類似している点や国家主導による組織的な鋳造が指摘されている点、及び中国北方地域の広大な範囲から出土していることからも裏付けることができる。

燕という国家は、自国の生産力のみに依拠せず、中原社会の枠を越えて中国北方地域を背景に交易を行っており、国家自体が、中原社会と非中原社会との懸け橋として存在していたと理解できる。すなわち、異文化との接触が、明刀銭という国家貨幣を生み出し、戦国燕を経済大国に押し上げた。そしてこの経済力こそが、燕における強力な専制君主権力の形成と斉占領を支えたと考えられる。

一方、燕と同じく中原に出自を有する春秋晋では、異文化との接触以降の社会の状況をより正確に理解することができる。

第二章「先秦期における中原と北方の関係について—晋における北方民との婚姻を中心に—」においては、春秋晋の周辺地域に、その一部がオルドス式青銅器の担い手となる戎狄と呼称される中原の文化とは異なる文化を有した集団がいたことが確認できた。そして、『史記』の記述から晋侯を中心としてその領域内において、元来の華夷理解では文化的に劣勢である戎狄との間に通婚関係が特別視されることなく存在していたことが分かる。この関係は晋の北方領域を受け継ぐ趙にまで存続しており、国家社会の末端まで行渡っていた。

すなわち、春秋晋では、異文化共生の過程において婚姻による混血化という手段が用いられ、春秋晋及び戦国趙の国君が純粋的な中

原民ではなく、狄との混血君主として誕生することとなった。このような異文化との共生社会によって引き起こされたのが戦国趙の胡服騎射である。

そこで第三章では、「戦国趙における「胡服騎射」改革」が中国社会にどのような影響をもたらしたのかについて検討した。異文化の風習である胡服騎射導入の背景には、趙による北方への領域拡大と異文化民の領域への内包があった。一方、『史記』や『戦国策』の胡服騎射記事には商鞅の変法記事との共通点が多い。両書の相違点の確認を行ってみると、胡服騎射の主目的が軍事力の強化であることが明らかになった。だが、元来異文化の風習である胡服騎射という行為は、戦国中山を滅ぼすという軍事的な効果以外に、旧来の中原的秩序の一端であった服飾制度にも変化をもたらすこととなった。

以上のように、中原民を主体とする国家における社会の変化について考察してみると、旧来の秩序・文化を濃厚に受け継いだ中原系国家は、異文化との接触の中で婚姻関係を結ぶなどの手段によって、異文化民と一つの共生社会を形成していった。このようにして形成された社会は、燕趙の両国で昭王と武霊王という強力な専制君主の権力を支える基盤として作用したと想定される。

これに対して、第四章と第五章では非中原民を主体とする国家について、異文化と接触することでどのような変化がもたらされたかを考察した。

第四章の「戦国中山国の社会と国際関係」では、先ず戦国中山という国家が中山王墓の考古遺物などによって先行研究で理解されているように中原文化とは異なる文化を有する国家であったことを確認した。次いで、その社会構成に注目すると、霊寿古城の一般墓葬からは様々な文化に依拠した人々が雑居していたことが看取でき、その社会では華と夷の区別が存在せず、共に一つの社会を形成していた。このような非中原民を統治者とする華夷共生国家であった中山は、当時の国際社会においては中原諸侯国の一員と認識されており、自らも同様の認識を持ち、周王の藩屏としての強い自負を有していた。すなわち、戦国の中山国は、他の中原諸侯国より中原的な諸侯国家を目指していたことが明らかになった。

次に考察対象としたのが、中山と同じく非中原文化に出自を有した秦である。第五章の「秦における異文化融合—春秋穆公期以前を中心に—」では、『史記』などの文献資料において、春秋秦が穆公期において中原諸侯国の中でも強国と位置づけられていることから、その国家強盛の基盤について考察するため当時の社会に注目した。大堡子山遺跡を中心とする春秋秦の墓葬と祭祀の検討から、中原の文化を取り込みつつ秦独自の文化を形成する過程を確認することができ、このことが春秋秦が強盛となる要因の一つであると考えた。このように独自の文化によって生み出された新たな社会は、戦国時代に次の段階に移行することとなった。そのことは、睡虎地秦簡「法律答問」に見られるように、旧来の秦を一つの社会と規定して、

「夏（華）子」「真」という新たな身分的区別のが設定されていることから、自国を中心とする新たな秩序体制の樹立が目指されていたことが理解できる。すなわち、戦国中山と同様に、出自が非中原文化の秦においても、華と夷が共生する社会の形成が進行していた。こうした社会は出自が問われず、商鞅（衛国出身）や李斯（楚国出身）などの登用にみられるように実力主義的な社会であった。そして、その後の秦における新たな占領地域における新たに形成された秩序体制を見ると、秦における春秋・戦国華夷共生社会が一つの到達点に達していたことが窺える。

以上のように、華夷共生社会は非中原的国家の拡大によっても形成される。秦の場合、中原を中心とした旧体制・秩序から脱却することが国家発展をもたらした。春秋・戦国時代に誕生した華夷共生社会こそが、秦帝国の社会の中核を占めることとなるのである。

結　論

春秋・戦国時代の北方諸侯国においては、華と夷が共生社会を形成していた。そして、趙や燕のような中原出自の国家では、そうした社会が強力な専制君主権力の形成をもたらした。その一方で、秦や中山のような非中原出自の国家では、それは国家領域の拡大に必要となる新たな統治秩序形成の契機となったが、旧来の中原的秩序・文化への志向性によっては、中山のように旧秩序に替わる新秩序は生まれることが無かった。しかし、秦では帝国形成段階において、華夷共生社会は新秩序形成の下地となった。

先行研究において示されてきた領域国家形成による領域拡大の過程で、優れた中国文化が異文化を取り込んでいく、又は中原文化の独自発展により秦漢帝国が形成されるといった中原文化優勢史観は必ずしも妥当とは言えない。すなわち、北方地域における異文化との接触によって引き起こされる共生社会の誕生こそが、強力な専制君主権力の誕生や新秩序の形成といった歴史的契機となったのである。西周時代以来の氏族制社会の崩壊とともに、北方地域においては異文化共生社会が誕生することとなり、この共生社会が秦漢帝国形成に大きく関わっており、秦漢帝国そのものが華夷共生社会の完成型であったと言うこともできる。

註

① 宇都宮清吉氏は「古代帝国史概論」（『漢代社会経済史研究』弘文堂、一九五五年）において中国の都市国家における氏族制の強さを指摘し、ギリシャ的都市国家との区別の為に、邑制国家の呼称を用いる。

② 貝塚茂樹氏の『中国の古代国家』（『貝塚茂樹著作集』第一巻　中央公論社　一九七六年）や「中国古代都市における民会の制度」（『東方学論集』第二冊　一九五四年、のち『貝塚茂樹著作集』第二巻　中央公論社　一九七七年所収）、宮崎市定氏の「中国上代は封建制か都市国家か」（『アジア史研究』第三　同朋社　一九六三年、のち『宮崎市定全集三　古代』岩波書店　一九九一年所収）などが代表的研究。

③ 「総説」『岩波講座　世界歴史四　東アジア世界の形成Ⅰ』岩波書店、

一九七〇年。このような中国中心史観による古代史理解は、すでに内藤湖南の研究にも見られる。

④ 好並隆司氏の『秦漢帝国史研究』（未来社　一九七八年）は、秦を征服王朝として捉え、中原の文化に対する野蛮性によって帝国を形成したと捉えており、従来の研究とは一線を画す。しかし、この論も中原が文化的な地域であり、夷狄である秦を野蛮とする点において従来の華夷思想に基づく研究であると言える。

⑤『『春秋』と『左伝』』中央公論新社　二〇〇三年。

⑥「中華の形成と東方世界」（『岩波講座　世界歴史三』岩波書店　一九九八年）、『秦帝国の形成と地域』（汲古書院　二〇一三年）終論　秦帝国史研究の総括と展望　第二章　秦帝国史研究と地域

⑦『古代〈中華〉観念の形成』岩波書店、二〇一〇年。

⑧ 楊建華『春秋戦国時期中国北方文化帯的形成』（文物出版社　二〇〇四年）が代表的な研究。

⑨『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店、二〇〇〇年。

⑩「北京の小さな橋―街角のグローバルヒストリー―」関根康正編『ストリートの人類学』下巻（国立民族学博物館調査報告八一）二〇〇九年。

⑪「動物人格化にみる農業文明を征服する秦帝国の原理―龍崗秦簡の動物管理律令を中心として―」『山口大学文学会志』六二　二〇一二年。のち『秦帝国の領土経営―雲夢龍崗秦簡と始皇帝の禁苑―』（京都大学学術出版会　二〇一三年）所収。

⑫ 本論文では、共生を依拠する文化の異なる複数の集団が、互いの文化を受容することで共存することと定義付けて使用した。